【事例タイトル】
認知症の母Aさんと娘Bさんの2人暮らし。親子共に問題意識は感じていないが、周囲の人から見ると衛生環境に問題があると感じている事例。

【演習の目的】
現在、介護サービス利用は拒否的、消極的な家族。しかし、このままの生活が継続していく事で生活の質が低下していく事は目に見えている事例。
介護サービスについて拒否的なご本人、ご家族とどのように信頼関係を構築していったら良いのか。地域住民からの通報から始まった支援ではあるが、本当にサービスが必要なのかも含めて、サービスが必要であればどのように動機づけをしたらよいのか、本人たちに意思決定をしていただく支援をどのように展開していったらよいのか、演習を通して検討を深めてゆきたい。

【事例概要】
〇Aさん 80歳後半　女性　要介護１　認知症の疑い（確定診断なし）難聴
・生活歴：東北生まれ。20歳頃上京し、洋裁学校卒業後に洋品店で仕事をしていた。25歳頃結婚し、1人娘を出産。以来、仕事と育児、家事をこなし一家を支えていた。活動的で社交的。町内会の活動にも積極的に取り組んでいた。
・身体機能：本人家族からの聴取でADLはほぼ自立、見守りや声かけ程度だが、実態は不明。

〇娘Bさん50歳代　女性　学校を卒業後、会社で事務の仕事をしている。内向的で母に依存傾向。結婚歴はない。近所づきあいは昔からしていない。

〇近隣との関わりはAさんの夫が存命のときには町会のことで人の出入りもあったが、今は顔を合わせれば挨拶をする程度で会話は好まない。近隣に親戚関係は住んでいない。